



# 新春対談

作家 池井戸潤氏 × 市長 工藤正司

## 街と産業の発展は、自らの強みを知ることから

池井戸潤さん(以下「池井戸」) そうでしたか。当時は、まだあったんですね。市長 ソール(底)がゴムのもので、「こ」というものがあるんだ」と驚いた思い出が、作品の場面と重なりました。行田の風景も登場しますから、発刊以来、多くの方々に「行田市民の物語です」とご紹介しています。


工藤正司市長(以下「市長」) 『陸王』は、ランニングシューズの開発に挑む老舗足袋メーカー、こはぜ屋と、選手生命を賭けてレースに挑む実業団ランナーたちの物語。行田市が舞台であり、また、私は若い頃に陸上競技をやっていたこともあって、とくに身近に感じました。小学2年生の頃、マラソン大会で優勝したことがあったんですが、そのご褒美が、まさにマラソン足袋だったんです。

### 行田で「復活」した物語

足袋の街・行田市を舞台にした、池井戸潤さんの『陸王』。伝統産業の復興と挑戦の尊さを描いた小説は、読む人を勇気づけます。執筆にあたり、市を訪問された作家の目から見て、産業振興、地域活性化を目指す上で、今、必要なことは何ですか？

平成29年をさらなる発展の年にするための、ヒントを伺いました。

『陸王』池井戸潤作 (集英社)



池井戸潤さんの小説で、行田市が舞台となっています。老舗足袋メーカーがランニングシューズの開発に挑む物語。世界的スポーツブランドとのし烈な競争や資金難、素材探しなどに挑戦し続ける主人公の姿が描かれています。ランニング足袋「陸王」や「こはぜ屋」は池井戸さんのオリジナルですが、小説執筆に当たり、市内の足袋メーカーで取材されたそうです。

池井戸 ありがとうございます。実はこの小説は、いったん途絶えかけていたんです。ランニングシューズ開発を思い立つのを、当初は地下足袋メーカーに話したんですが、実際にメーカーの方に話



平成29年

# 年頭のごあいさつ

行田市長 工藤正司

明けましておめでとうございます。市民の皆様におかれましては、輝かしい新年を健やかに迎えのことから心から慶び申し上げます。本年が皆様にとりまして、希望にあふれ、幸多き素晴らしい年となりますよう心からお祈り申し上げます。

さて、昨年を振り返りますと、4月の熊本地震をはじめ、8月には台風の相次ぐ上陸による河川の氾濫や土砂崩れ、さらに、10月には鳥取県中部で、未確認の活断層が原因と思われる震度6弱を記録する地震が発生するなど、全国各地で大規模な自然災害が数多く発生した一年でありました。

一方、本市におきましては、地方創生の流れの中で、行田版「総合戦略」に基づく施策をはじめ、7月には、行田商工会議所、南河原商工会及び市内7金融機関と、県内初となる「地方創生に係る包括連携協定」を締結するなど、「行田創生」に向けた取組みを官民一体となつて着実に進めてまいりました。

また、行田を舞台に老舗の足袋メーカーが逆境を乗り越えながら、新規事業であるランニングシューズの開発に奮闘する姿が描かれた、作家 池井戸潤氏の小説「陸王」が大ヒットし、かつて全国シェアの8割を誇った「足袋のまち行田」が再び脚光を浴びる大変喜ばしい出来事がありました。

本年は、こうした好機を逃すことなく、「足袋」に焦点をあてた施策を積極的に展開してまいりたいと考えております。その取組みの一つとして、「行田足袋」ブランドの価値向上と市場拡大を通じて地域経済の活性化を図る「足袋のまち行田」活性化プロジェクト」を官民一体となつて強力に推進してまいります。また、本市が物語の舞台となつていくことから、新たな市の魅力として様々なメディアを通じて情報を発信し、さらに多くの方に行田にお越しただけのよう、経済効果に繋がる観光戦略を展開してまいります。

なお、3月には、秩父鉄道の新駅である「ソシオ流通センター駅」が開業いたします。これにより、利便性の向上はもちろんのこと、新たな住宅建設など、地域活性化の大きな起爆剤となることを期待しております。

今後とも私は、暮らしの安心安全の確保に万全を期すとともに、行田ならではの個性や独自性を活かした取組みなどに積極果敢に挑戦し、持続可能な活力ある「笑顔あふれる元気な行田」の実現に向け、全身全霊を注いでまいります。市民の皆様には、市政に対するより一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

